

皆さん、こんにちは。

ご紹介をいただきました岩手県知事の達増拓也です。

今年は明治維新、1868年から150年を記念する年ということで、10月23日には政府主催の記念式典がありました。

皆さんが持っている資料の表紙のロゴに、明治150年と書いてあるものが、日本国政府が決めた明治150年のマークですね。

地方でも、薩長土肥4県知事サミットが行われました。

薩摩・長州・土佐・肥前、これは今で言うと、鹿児島県・山口県・高知県・佐賀県に当たります。知事サミットでは4県の知事さんが集まったわけですが、高知県知事さんは坂本龍馬の格好をしたり、当時活躍した偉人の格好をして、テープカットを始めとしたセレモニーに出席していた写真を見ました。また、福島県や会津若松市でも、こちらは戊辰戦争150年行事ということで、明治維新というよりも、そこに至る戊辰戦争の戦いに着目した行事を様々やっています。変わったところで、北海道では「北海道命名150年記念」という事業を行っていますね。それまで蝦夷地と呼ばれ、北海道という名前になったのが明治維新の年、つまり150年前で、そういった事業を行っています。

岩手県でも「楢山佐渡150年遠忌」という、盛岡藩の家老だった楢山佐渡（ならやまさど）が亡くなって150年の節目に合わせた行事が盛岡市で行われたりもしました。

テレビではNHKの大河ドラマで、「西郷どん」という明治維新を扱ったドラマを放映していましたね。

このように様々なイベントが日本中で行われていますが、全体として今一つ盛り上がっていないのではないかなという気がしています。

なぜかと考えたのですが、明治維新について語るには大きく二つの難しさがあると思います。

一つは明治維新というものを、薩摩・長州を始めとする「官軍」と、ここ南部盛岡藩を含む東北諸藩と徳川家を合わせた「賊軍」との戦いとして見ますと、150年前、日本が官軍と賊軍に分かれて戦い、官軍が勝ち賊軍が負けたみたいなお話になり、日本を分断してしまうような話になってしまいます。

もう一つは明治維新、いわゆる薩長藩閥政府という官僚独裁の国になり、日本が日清・日露の戦争を経て、どんどん軍国主義化を進めたことにより、あの悲惨な第2次世界大戦につながったのではないかという見方もあるからです。第2次世界大戦は、日本として深く反省しなければならないことなのですが、そこに至る歴史のスタートが明治維新だったのではないかとの見方もされるわけです。

でも私は明治維新というのは、良かったことが多くあったと思っており、日本全体で心から明治維新150周年という節目をお祝いすることができればいいなと思っています。そういうことから、私なりに色々と考え、こういった見方をすればいいのではないか、こういった考え方で明治維新を捉えればいいのではないかということでまとめたのが、「明治維新は岩手で始まり岩手県人が完成させた」という明治維新の見方です。

この捉え方によって、まず「岩手で始まり」という部分は、我々が相馬大作こと下斗米秀之進が、ここ二戸の地で始めたという意味でありますし、「岩手県人が完成させた」というのは、盛岡出身の原敬。親しみを込めて原敬（はらけい）さんと呼んだりしますが、原敬首相就任で明治維新が完成したと見ますと、官軍対賊軍という分断を避けることができます。そして、明治維新が大正デモクラシーの民主主義と国際協調につながり、それが明治維新の成果だと評価することができます。

私は今年の初め頃から、この考え方を様々な機会ですべてきたのですが、今回、藤原淳二戸市

長さんがこの考え方に賛成をしてくださって、今日、このようなすばらしい会を企画してくださいました。

二戸市民文化会館の大ホールで「明治維新は岩手で始まり」という、明治維新が始まった場所「二戸」でこの話をする事ができる。二戸市民の皆さんや福岡高校、福岡工業高校の皆さんに、この話をする事ができるということを、私は大変うれしく思っています。

明治維新、戊辰戦争でこの明治維新というのが決まるわけでありますけれども、まず、幕末における岩手の先進性ということをお話ししたいと思います。

この戊辰戦争で南部盛岡藩は戦に敗れ、賊軍とみなされ、明治維新に乗り遅れた弱くて遅れた藩だったのではないかとというイメージがあるかもしれません。

しかし私は前から、そうではなかったのではないかと考えていました。

南部藩あるいは盛岡藩、この藩は結構強くて進んでいた藩だったのではないかと疑っていました。

なぜそういったように考えていたかと言いますと、明治以降岩手県からは、4人も総理大臣が出ているのです。これは数え方にもよりますが、長州藩だった山口県の次ぐくらいに多いのです。東京出身というのも数え方が難しいのですが、東京出身者を多く数えると3番目になります。いずれ全国有数の数の多さです。

また総理大臣だけではなく、新渡戸稲造さんでありますとか後藤新平さんのような、日本の近代化を引っ張ったリーダー役の人たちも、岩手から出ています。

総理大臣がたくさん出たことについては、戊辰戦争で負けた悔しさ、賊軍とされた悔しさをバネにし、頑張って総理大臣になったという面もあるのだと思います。しかし、最初の政党内閣の総理大臣になったのは岩手出身の原敬さんですけれども、ただ悔しさをバネにしたというだけでは、やはり総理大臣になるのは簡単ではありません。やはり元々生まれ育った地域にそれなりの強さがあり、先進性がある地域でないと、その土地の出身の人が総理大臣になるというのは難しいことでもあります。

そういったことを私が考えていた時、釜石の橋野鉄鉦山が世界遺産に登録されました。3年前のことです。3年前といえば平成27年(2015年)ですけれども、釜石の橋野鉄鉦山が、「明治日本の産業革命遺産」の一角として、世界文化遺産に登録をされました。このことで私は、やはり江戸時代の終わり頃、いわゆる幕末の岩手県というところは非常に進んでいた、先進的だったということを確認しました。

「明治日本の産業革命遺産」は23の構成資産、23か所からなっているのですが、23のうち21か所が九州と山口県にあります。これは薩摩藩や長州藩、佐賀藩など、西南雄藩と呼ばれる明治維新の時に官軍として戦い、勝利した藩のある地域に密集しているということです。23のうち21が九州と山口県で、あとはどこかというところ、幕府の直轄領だった静岡県の韮山というところと、岩手県の橋野鉄鉦山の2か所が賊軍とされたところから選ばれています。

幕府直轄領の韮山は別格として、賊軍とされた藩でこの「明治日本の産業革命遺産」の構成資産があるのは岩手県だけ、昔の盛岡藩だけでありまして、実はここ岩手には、薩摩・長州のような西南雄藩に匹敵する先進性、進んだところが江戸時代から存在していたということを確認しました。

橋野鉄鉦山を開発したのは、盛岡藩士の大島高任(おおしまたかとう)という人です。国内で初めて鉄鉦石を用いた西洋式の高炉で鉄の生産を成功させました。大島高任は、当時日本で1番の鉄の専門家、そして鉄を使った大砲などを製作する専門家でもありました。オランダの最新式の本を大島高任が日本

語に翻訳し、それを日本中の近代製鉄に関心のある人たちが読んで勉強していたそうです。

この大島高任という人は、明治維新の5年前、1863年に『藩政改革書』という政策論を書いています。南部盛岡藩近代化計画というような内容ですね。その中身を読んでみますと、開国・貿易・殖産興業・富国強兵・義務教育など、明治時代になって日本が採用する近代化の路線、近代化の政策を、既にこの岩手において先取りするような内容になっていました。

これは非常に進んでいることでありまして、明治維新の5年前は、新選組ができた年でもありますね。京都は政情不安定で、「日本は開国すべきだ」、「いや外国人とは戦うべきだ」などと意見が二つに分かれ荒れていた時代でした。長州藩でも、外国船と大砲の打ち合いをするなどして、まだまだ明治以降の日本の近代化路線というものを日本全体としては見つけられないでいた時、既に岩手県では、大島高任がそれをはっきり『藩政改革書』という本に書いていました。大変すごいことであります。

大島高任は『藩政改革書』の中で、「この南部の国は地域資源も豊富で、この豊かな資源を本格的に開発し、みんなで力を合わせれば、天下無双の国になることができる、日本一の藩になることができる」ということを書いていました。天下無双という言葉が使われていますが、大島高任は、岩手は日本の中で遅れた田舎というイメージを持っていたのではなくて、日本一になれる地域だとはっきり考えていました。

なぜ当時の岩手がそのように先進的だったのかというのは不思議だと思いますが、幕末、明治維新の歴史を振り返りますと、今のままではだめだ、日本を変えなければならぬということを多くの日本人が思い、日本が目覚めたきっかけというのは黒船来航でした。

アメリカのペリー提督が黒船を率いて日本に来航し、そのショックで日本中が、これは大変だ、日本は今まではだめだ、変わらなくてはいけないというふうに目覚めたわけなのですが、この外国との接触、外国との出会いというのが人の意識を変えますね。そして、地域や国の考え方も変え、自分たちが変わり、未来に向かって進んでいかなければならぬという思いを引き出すのだと思います。

この点に注目し、江戸時代の歴史を遡りますと、南部盛岡藩は実は黒船来航よりも50年くらい前にロシアと関わって、日本の中でも1番早く外国との出会いを経験していました。江戸時代、日本としては長崎の出島でオランダ人商人と極々限られた外国との接触をしていたのですが、そういう鎖国中の例外的な外国との接触を除けば、大々的に外国あるいは外国人と接触をし「さあこれからどうなる大変だ」というような思いをしたのは、今の岩手県、当時の南部盛岡藩でありました。

その話を詳しく述べる前にまず、今日の主役である二戸という土地について、この土地の意義を確認しておきたいと思います。

福岡を中心とするここ二戸の歴史は、何と云っても九戸政実公が九戸城を建てたことから、本格的に始まると言っていいでありましょう。九戸政実公あつての福岡であり、二戸であります。九戸政実武将隊のパフォーマンスや、市民文士劇での九戸政実を題材にした演劇の上演など、最近、ここ二戸近隣の市町村も含めまして、二戸エリアで九戸政実のことが盛んに取り上げられるようになっているというのは大変素晴らしいことだと思います。最近も10月21日から22日まで二戸市民文士劇「九戸城と女たち」がここで上演されました。二戸市長さんも出演して、総勢200人の市民の方々の熱演で大変な好評を博したということで、おめでとうございます。二戸市民文士劇は九戸政実公のほかに、これから話しますけれど、相馬大作のことも取り上げていて、大変素晴らしいと思います。

さて、九戸政実公であります。天正19年(1591年)、天下人豊臣秀吉が送り込んだ大軍勢と戦いま

すが、その時、蒲生氏郷（がもううじさと）を総大将に、そうそうたる顔ぶれの戦国武將が九戸城を取り囲みました。

今私たちがいる場所、ここ二戸市民文化会館は、馬淵川をはさんで九戸城跡の対岸にあるわけで、このあたりには豊臣方の北海道（松前）、青森、秋田の軍勢が布陣していたということでもあります。九戸城は、西に馬淵川、北に白鳥川、東に猫淵川と三方を川に囲まれ、南側は幅 20 メートルから 40 メートルの巨大な空堀が掘られていました。自然の地形を最大限生かして、堅い防衛施設で守られた全国有数の難攻不落の城でありました。

大変良い場所に大変良い城が築かれたということでありまして、そこはやはり九戸政実公、さすがであります。

この二戸の地は江戸時代、南北の奥州街道と、東に行く八戸街道、西に行く浄法寺街道の三つの街道が交わる十字路的な場所でした。浄法寺街道はさらに鹿角街道に接続して、秋田や弘前方面につながっています。街道というのは、江戸時代であれば幕府や藩によって人々の往来のために整備された道でありますけれども、縄文時代から古代・中世にも同じような道、交流の道筋があったと考えられていて、ここは昔から、そして今でもとても便利な場所だということでもあります。

九戸政実の乱が終わって豊臣方の名將、文武の誉れ高い蒲生氏郷が、九戸城とその城下町を改修整備して、南部氏当主の南部信直に引き渡しました。

南部信直は三戸城から九戸城に本拠を移し、そしてここを福岡という名前に決めました。

「幸いの住む岡」という意味で、福岡という名前にしました。そして、この福岡城が三戸南部氏の本拠地となったわけであります。

蒲生氏郷の遺品として、蒲生家から南部家に贈られた鯰尾兜（なまずおのかぶと）があり、資料にも写真を載せていますけれども、この鯰尾兜は岩手県指定の有形文化財で岩手県立博物館に展示しています。

蒲生氏郷は勇猛果敢で戦闘力も高かったのですが、千利休の直接の弟子でお茶に通じた文化人でもありました。そういう蒲生氏郷にふさわしい兜だと思います。

ここ福岡の地は南部氏の政治拠点、南部氏の本拠地、南部氏の中心になったわけですがけれども、やがて南部氏は、不來方の地域、今の盛岡ですね、そちらに本城を移すことにして、「福岡」の次は「盛岡」ということですね、「盛り上がり栄える岡」ということで盛岡と名前を付け、そちらの方に引っ越しをするのですが、その間 20 数年ありますので、江戸時代の初め頃のこの 20 数年間は、この福岡が南部の中心だったわけであります。というわけで二戸福岡の地は、江戸時代初期の南部領の中心でしたが、江戸時代の終わり頃にも南部領における明治維新運動の中心となります。南部領だけではなく、日本全体の中でも中心の役割を果たしたと言ってもいいくらい、大事な役割を果たしました。

いよいよ岩手二戸において、明治維新が始まることを述べていきますが、その前に、中心ということについてお話をしたいと思いますけれども、特に高校生の皆さん、ともすればこの日本の中心は東京で、そして岩手県は日本の端にあり、日本の端に位置する岩手県のさらに端に二戸市があるとイメージするかもしれませんが、昔、日本の中心、首都は京都でした、その前は奈良県でした。日本の首都はどこにあってもよいわけでありまして、そういう意味では、この日本の中心がどこにあってもいいわけです。世界に視野を広げますと、「世界の中心で、愛をさけぶ」という映画がありましたが、どこが世界の中心だと思いますか。

実は世界に中心というものはありません。それを逆に言うと、どこが中心であってもいいのです。世界のどこが中心であっても構いません。

これは、数学的に球体の表面には中心がないということでも証明されるのですが、私は昔、外務省で働いていたこともあって、今まで30か国ぐらい行ったことがあります。そのうちアメリカはワシントンDCを中心に2年間住んでいましたし、あとはシンガポールに2年間住んでいました。そういった世界のあちこちを回ってみますと、行った先々でその土地に住む人たちが、この場所こそ世界の中心だ、みたいな感じで生活したり仕事をしたりしていましたね。ですから、世界のどこが中心であっても良く、また、主体性さえあればそこが世界の中心になる。そういうものだなと思いました。とりあえず自分のいるところが世界の中心だと思ってくれて構わないです。

そして自分がいるところがなぜ世界の中心なのかということ、そこに主体性があるからですね。「これから、自分はどういうことをしていこう、世の中をどういうふうにしよう」みたいな気持ちが湧いてくる場所というのが世界の中心で、江戸時代の終わり頃はまさにこの二戸の地が日本の中心、世界の中心といってもいいようなところになったわけです。

江戸時代、幕府は長く鎖国政策をとっていましたが、幕府が始まってから200年ほど経ちますと、頻りに外国船が来航するようになります。

1792年、ロシアのラクスマンが根室に来航し日本に通商を求める事件が起こりました。アメリカ、ペリー黒船来航の61年前です。幕府はロシアの要求を拒絶し、ロシア船の接近が相次ぐ蝦夷地、今の北海道の警備を盛岡藩と弘前藩に命じました。

盛岡・弘前両藩は函館に約500人の足輕を派遣し、その後盛岡藩はさらに700人を追加派遣します。非常に大勢の兵士が盛岡藩から蝦夷地、北海道に派遣されたわけです。派遣された盛岡藩の藩士たちは厳しい自然環境の中で、異国船の来航、ロシア船の来航に備えました。これは大変な日本全体に対する貢献だということで、徳川幕府は盛岡藩を10万石から20万石に加増します。これを高直しというのですが、それで南部20万石と呼ばれるような石高になったんですね。

はい、ここでクイズを出してみたいと思います。

20万石の石高が、全国の大名の中で何番目ぐらいのランキングになるかということですね。大名というのは、この1万石以上の領主を「大名」と呼んでいました。3千石とか5千石の領主もいたのですが、そういう人たちは大名とは呼ばれません。1万石以上の石高の領主を大名と呼んでいて、日本には大体300人の大名がいたので300諸侯という言葉があります。

300諸侯と言われるように、300人ぐらいの大名がいたんですけども、南部20万石は、その300諸侯のうち、上から①100番目ぐらい、②50番目ぐらい、③20番目ぐらいのどれでしょうか。

300諸侯のうち、南部20万石は100番目ぐらいだと思う人は、手を挙げてください。大体そんなものだろうという感じですね。いやいや50番目ぐらいだろうと。そのくらいにはなるんじゃないかな。いやいや、20番目ぐらいもベスト20ぐらいの力があつた。

正解は22番目だったんですね。

だから、大体20番目という、三つ目の回答が正解であります。

南部盛岡藩の隣には伊達仙台藩があつて、伊達仙台藩は62万石ですから、南部20万石というのは何か小さい藩みたいなイメージを持つかもしれないのですが、伊達仙台藩の62万石というのが大き過ぎますね。全国3位でした。

1位が加賀100万石などといわれる、加賀金沢藩が120万石で1位だったんですね。

2位は薩摩、西郷どんの鹿児島藩が72万8千石、伊達仙台藩が62万石ですね。

南部盛岡藩20万石に近いのはどの辺かといいますと、長州藩が36万石、会津藩が28万石、土佐藩が24万石ですので、土佐藩ぐらいの力があつたと言つていいと思います。

そういう意味でも、この南部盛岡藩が幕末における雄藩の一つ、この西日本の西南雄藩と言われるような藩に匹敵する力があつたというのは、石高の面でもそうだったんですね。

ただ、よく考えてまた思い出してもらつたと、元々10万石だったのが20万石になったので、その分領地が広がったかという領地は広がっていないんですね。収穫できるお米の量は変わらないのに、10万石から20万石に増やされたので、実は経済力は10万石のままだったわけです。

ただ10万石でも300諸侯のうち、40番から50番ぐらいのランキングにはなります。10万石でも300諸侯のうち40番から50番ぐらいで、40番の力はあつたんです。ただ、20万石になり、20万石にふさわしい貢献を日本全体にせよということで、北海道に兵を送らなければならなくなった、そこは20万石分の働きをしなきゃならない、20万石分の出費が強られるわけですね。

10万石分の収入しかないのに20万石分の出費をしなければならなかったので、南部盛岡藩は財政的には大変厳しく、経済的には貧しい藩になってしまったわけでありましてけれども、ただこの外交や防衛のような仕事については、堂々と20万石の仕事を300諸侯のうち、22番目ぐらいの大きな仕事をしていて、それが南部盛岡藩だったわけでありまして。

そういう大きい仕事を南部盛岡藩がやって、大勢の人たちが北海道に行ったり来たりするわけですが、その中で時代の変化をいち早く感じ取り行動に出たのが、我々が相馬大作こと下斗米秀之進でした。

下斗米秀之進は、今からちょうど200年前、1818年、それは明治維新のちょうど50年前ですけれども、1818年にここ福岡にある自宅に、私塾、個人が経営する塾ですね。藩のお金で、あるいは幕府のお金でやる塾ではなくて、個人のお金で経営する塾、私塾「兵聖閣（へいせいかく）」を開きます。

そこに多くの弟子を集めて、学問や剣術、兵法などの修行を始めます。人がどんどん集まってくるので自宅では狭くなり、同じ年、金田一に兵聖閣を移します。

金田一の広い土地に兵聖閣を移しまして、200人以上の門弟、弟子たちがそこで勉強したり、修行をしたりしたそうでありまして。

こういう塾は、その後、長州藩、今の山口県の松下村塾という吉田松陰が開いた塾が大変有名になりますし、あとは大河ドラマなどを見ていると、勝海舟の塾、そこに坂本龍馬がやってきたなんていうことがありますね。

日本中に塾というものがどんどんできて、そこで日本を変えるために必要な学問をし、またそのために体を鍛えたり、兵法を学ぶための修行をしたり、剣術の修行を含めてそういうところが、日本のあちこちにできていくんですけども、一番最初の本格的な塾が、相馬大作こと下斗米秀之進の兵聖閣だったと思います。

それがここ、今の二戸の地にできたのはすごいことでありまして、私はこの下斗米秀之進の私塾「兵聖閣」ができた1818年を、日本で明治維新が始まった時だとしてとらえるべきだと考えております。

下斗米秀之進が偉いのは、南部領の中にだけそういう塾を作るのではなくて、仲間とともに、今の静岡県浜松市に第2の兵聖閣を作ろうとしました。

これは結局実現しなかったのですが、この日本を変えようと藩を越えて人とつながり、藩を越えて行動するところがすごいわけでありまして、まさにこの明治維新の志士として、明治維新の原動力になって活躍したといえると思います。

そうやって、今の二戸の地で下斗米秀之進が先頭に立ち、この明治維新の動きの最初の第一歩が踏み出されるわけでありまして、それが1818年。その2年後の1820年に、当時の盛岡藩主南部利敬（なんぶとしか）が亡くなって、弘前藩主津軽氏の方の官位が南部氏を上回ることになるんですね。この江戸城の中での偉い順番が、津軽氏が南部氏を上回る状態になり、このことに憤りを強く感じた下斗米秀之進は、弘前藩主の参勤交代を襲撃する計画を立てます。

この計画は失敗に終わり、下斗米秀之進は藩に迷惑がかからないように、これは全て自分個人で仕出かしたことで個人的な罪です、というふうにするために江戸へ逃げて行き、そこで相馬大作の名前を名乗るようになるんですね。しかし、やがて捕えられて1822年の8月に処刑されてしまいます。

ただ、この相馬大作なる人物が自藩の主君の不名誉を晴らすために、命をかけて大きなことを仕出かそうとしたというのが、江戸の人々を始め日本中で評判になるんですね。忠臣蔵赤穂浪士の再来と騒がれました。

毎年日本ではこの12月、赤穂浪士の物語「忠臣蔵」がテレビで放映されたり、また本で読まれたりするんですけども、それと同じくらいすごいことだ、あっぱれなことだというように日本中でもてはやされたんですね。

これは明治時代、大正、昭和の初期まで続きまして、講談、小説、さらには映画にもなって、日本で映画が始まった頃に、この相馬大作ものが頻繁に映画化されています。それで日本中で映画が見られるようになって、（相馬大作は当時の方にとっての）ヒーローになったんですね。

そういう相馬大作事件でありまして、明治維新の重要人物である水戸藩の藤田東湖（ふじたとうこ）も注目し、著作に取り上げられ、藤田東湖は相馬大作の行動を大いにたたえました。

そして、明治維新の最重要人物の1人である長州の吉田松陰も、相馬大作を大いにたたえました。

松下村塾を主宰し、その後明治維新の志士となる人たち、明治時代のリーダーになる人たちをどんどん育てた吉田松陰ですけれども、吉田松陰は22歳の頃に、対ロシアの北方の警備状態を視察しようとして東北旅行をしているんですね。

その時に相馬大作が弘前藩主を襲撃しようとした場所なども訪れていて、相馬大作の行動をたたえる「漢詩」、漢文による詩を作って、それを書き残して今に伝わったりもしています。

日本を変えようとして藩を越えて学び、藩を越えて行動し、藩を越えて影響を与えるような人を「志士」と呼ぶことができると思いますが、相馬大作こと下斗米秀之進こそ、志士の第1号と言えるでめりましょう。

その後、坂本龍馬とか西郷隆盛とか桂小五郎とか高杉晋作とか、いろいろな志士が出て活躍し、明治維新を実現していくんですけども、そういう志士がたくさんいる中での一番最初、志士第1号は相馬大作だったと言っていいと思います。

繰り返しますけれども、相馬大作こと下斗米秀之進が私塾兵聖閣を開いたのは1818年、明治維新のちょうど50年前にして、今からちょうど200年前であります。

この時を日本における明治維新の始まりと見ることができるといいます、ということをお今日ここで二戸の皆さんを前にして話すことができ、本当にうれしく思います。200年前のことでありました。

さて、この相馬大作＝下斗米秀之進が亡くなった後、兵聖閣がどうなっていくかですけれども、やがて会輔社（かいほしゃ）という名前になって、みちのくの松下村塾と呼ばれるようになります。

下斗米秀之進の精神を受け継いだ 1 人であり、吞香稲荷（とんこういなり）神社の宮司、小保内孫陸（おほないまごろく）という人が、その神社の敷地に槻蔭舎（きいんしゃ）という私塾を立てるのですが、これが兵聖閣を引き継いでいくことになります。

この槻蔭舎で小保内孫陸は、二戸の青少年に様々な学問や、書道や和歌のようなことも教えました。

そして、黒船が来航して日本中がいよいよ日本を変えなきゃだめだとなってきた頃、黒船来航の 5 年後の 1858 年に、長州藩の小倉鯉堂（おぐらこんどう）という人が二戸福岡を訪れました。

吉田松陰や桂小五郎の親友だった小倉鯉堂は、小保内孫陸の息子小保内定身（おほないさだみ）とも非常に仲が良くなりました。小倉鯉堂は小保内孫陸とすっかり意気投合して福岡の青年士族を集めて会輔社を結成します。ここに相馬大作、下斗米秀之進の兵聖閣の後継である会輔社が設立されます。

小保内孫陸の長男、小保内定身が会輔社を引き継ぎまして、その会輔社が、みちのくの松下村塾と呼ばれたということでもあります。

松下村塾は日本最大の明治維新の志士の拠点だったわけですので、第 2 の松下村塾、それがここみちのく東北福岡の地にあったことは大変すごいことだと思います。

日本に二つあるこの明治維新の一大拠点の一つが、会輔社だったということですね。

さすが日本を代表するような知の拠点でありますので、小保内定身は稲荷文庫という図書館も作りました。公開図書館として、広く多くの人に読んでもらえるようにと公開型の図書館として作りまして、この南部盛岡藩随一の公開図書館になりました。

やがて 1868 年、今から 150 年前、明治維新の戊辰戦争が始まってしましまして、南部盛岡藩は薩摩・長州藩などの官軍方と戦うことになります。

長州の松下村塾側と、みちのくの松下村塾こと会輔社側が、お互いに戦うことになってしまったわけでありすけれども、やはり私たちは、藩対藩という枠組みに捕らわれ過ぎてはならないと思います。明治維新を藩単位の競争とか、藩単位の戦いの歴史とだけ見ては、この明治維新の本質を見誤ってしまいます。

明治維新という、この日本を変える大きな運動を引き起こしたその原動力は、どこかの藩とかあるいはいくつかの藩とかというような昔からあった組織ではなくて、日本を変えなければならないことに気づいて剣術や学問に励み、志を同じくする仲間とつながっていった人と人とのつながり、言わば「学びのネットワーク」というものが、明治維新を成し遂げたと理解すべきでありましょう。

日本中を結び付ける「学びのネットワーク」が明治維新を成し遂げたわけで、「学びのネットワーク」を真っ先に作り始めたのが、相馬大作こと下斗米秀之進であり、その仲間たちだったということは、これは何度繰り返してもいいことだと思います。

そういう「学びのネットワーク」の中に、大河ドラマに出てくるような西郷隆盛とかですね、勝海舟とか坂本龍馬も入ってくるわけでありまして、そのような人のつながりこそが明治維新を実現しました。

そういう人のつながりを一番最初に作り始めたのが、我々が相馬大作こと下斗米秀之進だったということですね。

全国的なネットワークによって明治維新を成し遂げていくんですけれども、この会輔社という形でこの二戸の地に土着化した、その学びの場がその後どうなったかといいますと、我が国の物理学の基礎を



築いた田中館愛橘（たなかだてあいきつ）博士や、牧羊業に取り組んだ蛇沼政恒（じゃぬままさつね）、農政指導者であり岩手県知事を務めた国分謙吉（こくぶんけんきち）、そして地質学者の田中館秀三（たなかだてひでぞう）らを輩出していったわけです。

これらの先人の方々のうち、何人かの後を追ってみたいと思います。

蛇沼政恒という名前を聞いたことある人は手を挙げてください。やっぱり多いですね。

私は今回、この「二戸の地で明治維新は始まり岩手県人が完成させた」という話をしようとしたことで、改めてこの二戸の歴史を学ぶ中で、蛇沼政恒というすごい人がいたことを知りました。だから、今年初めて私は知りまして、今まで勉強が足りなかったと反省をしております。

蛇沼政恒さんはいち早く、羊を飼う牧羊業に目を付けて数々の困難を乗り越えて不屈の精神で広大な上斗米、上野の原野を切り開いて上野牧羊場（うわのぼくようじょう）を開設しました。

蛇沼政恒さんは東京から二戸まで、この綿羊を運びました。東京から福岡までは約 680 キロですが、鉄道も車もない時代ですので、非常に大変だったわけです。15 頭の綿羊を連れて、明治 9（1876）年 5 月 23 日に東京を出発、6 月 15 日ようやく福岡に着いたということでもあります。

しかし、15 頭の羊たちはオオカミに襲われて全滅したんですね。ご存知の方が多いと思いますけれども。

蛇沼政恒さんはそのくらいではへこたれません。今度は東京から福岡まで 200 頭の綿羊を引き連れて歩くという、過去うまくいかなかったことでくじけるのではなく、もっと大きなスケールでそれを再挑戦するすごいことをやりました。

そのくらいの規模でやりますと、国や県の支援も受けて、牧場経営は大いに軌道に乗ったんですね。何度も失敗を繰り返しながら地域の人たちと協力して上野地区を開墾開拓し、今につながる大変すばらしい産業の発展に貢献した政恒さんでありました。

もう一人、会輔社の出身者、田中館愛橘さんについてもお話をしなければなりません。

田中館愛橘さんは、1856 年二戸市福岡で生まれて世界的な物理学者になります。

お父さんは盛岡藩士で兵法師範をしていたという人、お母さんは呑香稲荷神社の娘さんだったということで、おばあさんは相馬大作のお姉さんだったそうですね。

10 歳まで小保内定身の会輔社で、小保内定身から教えを受けていましたので、相馬大作＝下斗米秀之進の後継者の一人であるといえます。

やがて、愛橘は東京帝国大学理科大学の教授になります。田中館愛橘博士は東大理学部を確立するんですね。そして日本に物理学を打ち立てました。日本はその後、この物理学の分野でノーベル賞受賞者がどんどん出るようになります。

その流れの先に、I L C 国際リニアコライダーを実現しよう、国際的に作り上げようという話があります。田中館愛橘先生が、西洋の科学が全然なかった日本に近代的な物理学を打ち立て、そしてその弟子たち、その教え子たちのまたさらに教え子の教え子というような人の中から、ノーベル賞学者がどんどん出るようになり、特にこの素粒子物理学の分野でノーベル賞を受賞するような物理学者が日本からどんどん出ます。素粒子物理学の研究に必要な大型実験施設が I L C 国際リニアコライダーでありますから、岩手に I L C が建設されれば、それは遡れば田中館愛橘先生のおかげということになりますし、岩手に I L C 国際リニアコライダーが建設されて世界中から科学者の人たちも集まって、岩手の若い人たちも一緒に勉強したりするようになれば、田中館愛橘先生もきっと喜ばれると思います。

国際連盟の科学者グループのリーダー役もやって、国際的にも活躍された田中館愛橋先生でありますから、今そこにいらっしゃれば、このILC国際リニアコライダーをやろうやろう、やらせてくれ、とおっしゃるに違いないと思います。

ちなみに田中館愛橋先生の直接の恩師、直接の先生である山川健次郎という東大の物理学者は、南部盛岡藩と同様、賊軍とされた会津藩の白虎隊出身者なんですね。

会津藩の戊辰戦争、鶴ヶ城の戦いで戦場に参加していたという経歴の持ち主なんですけれども、その人が、明治に入ってから東大の物理学の最初の教授になって、それを田中館愛橋先生に引き継いで自分は東大の総長になるんです。

そういった縁もありますが、もう一人、国分謙吉さんのこともやはり触れたいと思います。第2次世界大戦が終わって日本国憲法ができ、日本の知事が選挙で選ばれるようになり、初めて岩手で選挙により選ばれた知事さんは、国分謙吉さんでありました。

国分謙吉さんは生まれた年が1878年、今から140年前ですね。亡くなったのは、1958年、60年前と言うことで、今年の1桁目1番下に8が付く年がこの150周年だったり、200年前だったり、そういうちょうどどの年になるんですが、そういう年に国分謙吉さんが生まれ、また亡くなられているのも因縁を感じるところであります。

国分知事は知事になられる前に、私立農業試験場を立ち上げ、岩手農蚕会社、岩手林業会社、国分農場を設立します。岩手県の農業の発展に大変大きな貢献をされたわけですが、そこにはやはり会輔社の精神が力強く生きていたと言えると思います。

戦後、岩手がとても苦しいときに、会輔社で学んで相馬大作＝下斗米秀之進の志の流れを組んだ国分謙吉さんが、知事になって岩手の新しい時代を切り開いたことは、岩手にとって大変ありがたいことだったと思います。

話を明治維新の時に戻します。1868年ですね。当時の南部盛岡藩を切り盛りしていたのが榎山佐渡という人でありました。お手元の資料では「4 新政府に抗した、盛岡藩家老榎山佐渡と平民宰相原敬」というところをお話いたします。

これは明治維新を完成させた、岩手県人の原敬さんにつながる話であります。

榎山佐渡という人が南部盛岡藩の家老として盛岡藩のリーダーシップをとり、奥羽越列藩同盟への参加を決めました。

奥羽越列藩同盟というのは、薩摩・長州を始めとする官軍の方に味方をするのではなくて、官軍がやっつけようと襲いかかってきた会津藩の味方をしようとするものでした。会津藩は決して悪い藩ではありません、東北の隣近所の私たちが保証します、戦争はしないようにしましょう、ということでできたのが、奥羽越列藩同盟でした。奥州＝東北、羽州は東北の日本海側ですね、越は越後のことで今の新潟県、今の東北6県プラス新潟県の部分にあった藩が、奥羽越列藩同盟を作りまして、それには榎山佐渡もリーダーシップを発揮しました。

その奥羽越列藩同盟からいち早く秋田藩が抜けちゃうんですね。薩摩長州の方に味方するというで秋田藩が抜けてしましまして、岩手県は秋田藩と戦う羽目になってしまいます。

秋田戦争と当時呼ばれて、秋田戦争なんておどろおどろしい名前で、あのすばらしい秋田県とかつて岩手県が戦争したというのは信じられないような話なんですけれども、この幕末の混乱の中で戦うことになってしまいます。

榎山佐渡率いる南部盛岡藩の軍勢はものすごく強くて、秋田藩の軍勢をどんどんやっつけて秋田県の領内にどんどん入っていくんですけれども、そこで薩長土肥の肥、肥前佐賀藩、今の佐賀県の軍勢が船で日本海側から秋田に上陸して最新鋭の兵器を使い、非常に強い軍隊が応援に駆けつけて秋田藩に味方をし、そして南部盛岡藩の方がどんどん負けて岩手に逃げ帰ってきたというのが歴史であります。

全国知事会議というのが毎年夏に開かれていて、去年は岩手県で開かれ、今年は北海道で開かれているんですけれども、NHKの大河ドラマで「八重の桜」という幕末明治の会津藩を舞台にし、会津藩士を主人公にした大河ドラマをやっている頃の全国知事会議で、知事さん方が自由にテーブルの席について昼御飯を食べる時間がありました。会津がある福島県の知事さんと私が向かい合っていて、知事さんに「八重の桜、大河ドラマがヒットしているいいですね」って話をしていたら、隣のほうに秋田県知事さんがいて、「あの時は申し訳ありませんでした」と謝ってきました。

ただ秋田県知事さんは「あの時一度は我々は滅亡しそうになったんですけれども、佐賀県から助けが来てくれたんで、生き延びることができました」と言って、佐賀県知事さんがちょうどまた隣にいたんですよね。と過去のことを振り返ったりもしております。

榎山佐渡が率いる盛岡藩は結局戦に敗れてしまい、榎山佐渡は南部盛岡藩全体を代表して責任を取るという格好で、一人切腹の形で処刑をされてしまいます。

榎山佐渡はもともと三戸南部氏の一族で二戸郡榎山村、今の一戸町にあるそうですけれども、今の一戸町の榎山村が元々の領地で、地名にちなんで「榎山」という名字にしたのだそうです。

今年の盛岡文士劇では、榎山佐渡を主人公にするお芝居をやっておりましたけれども、大変劇的な一生を送った立派なリーダー、榎山佐渡のルーツがこの二戸エリアにあるということが、やはり二戸エリアのすごさでもあると思います。

榎山佐渡が処刑される時に、後の総理大臣、原敬さんは14歳でこの切腹場所の報恩寺という寺の側まで行って、目に涙を湛えてその周りを歩いていたそうであります。大変悔しがり、また残念がっていた原敬さんでありますけれども、そのときの思いも胸にしながら後に総理大臣になるわけです。

この原敬さんが総理大臣になったというのはすごく大きいことでありまして、ちょうど100年前なんです。ですから、明治維新からするとちょうど50年後ということになるんですけれども、1918年に原敬さんが総理大臣になります。

薩摩長州出身で国の伯爵とか公爵とか、そういう貴族になっているような人じゃない人が総理大臣になったということで、原敬は平民宰相と呼ばれました。普通の人の代表が初めて総理大臣になったということで、当時みんな喜んだんですね。

また、初の本格的政党内閣を組織したんですね。選挙で選ばれた人たちが政党を作って、代表が総理大臣になり、その政党を構成する選挙で選ばれた国会議員が大臣になって内閣を作るという、今はそれがすごく当たり前のことなんですけれども、日本で初めてそれをきちっとやったのが原敬内閣でありました。

これは大変すごいことでありまして、もしそれがなかったら明治維新は、薩摩長州を中心とした独裁を生み出した良くない出来事とみなされていたと思うんです。けれども明治維新というのは、一方ではこの薩長藩閥政治をもたらすんですけれども、それに対抗する自由民権運動も起きるんですね。

岩手県も自由民権運動の一大拠点で、岩手の人たちも熱心に憲法を作ろう、議会を作ろうと自由民権運動を大いに盛り上げていました。

そして薩長藩閥政府の側も国会を作ったり、また明治憲法を作ったりと、そういった民主化や改革をどんどん進めて、それがこの大正デモクラシーとして日本に花開くわけですが、大正デモクラシーの頂点が岩手県出身の原敬の平民宰相としての政党内閣、首班としての首相就任ということであります。

これを明治維新の完成と見ることで、明治維新は一時、薩長藩閥政治のような官僚独裁政治を生み出したけれども、結局は原敬首相就任によって、立派な民主主義と国際協調も花開かせたというふうに明治維新を評価できるようになると思います。

国際協調というのも大事なことでありまして、原敬首相はアメリカと戦争してはならない、アメリカとはうまくやらなきゃならないと強く信じていたんですね。

そしてアメリカと仲良くしながら、中国にも経済関係で関わっていきこうと、日本が軍事的に中国を支配しようとするアメリカも黙っていませんので、アメリカと仲良くするためには、中国への軍事進出を止めなきゃならないんですね。

日本がアメリカと協力しながら、中国には経済的な形で関わっていく。

アメリカと一緒に経済的に中国と関わっていきますと、当時のソ連、今のロシアの脅威にも対抗できるし、当時満州と呼ばれた地域、第2次大戦の火種になる部分なんですけど、そこも諸外国が協調しながら、経済的に開拓していく場所にしていきこうと原敬さんは考えていました。

残念ながら原敬首相は暗殺されてしまって、原敬路線というものもうバツンと終わってしまうんです。やがて日本は民主主義を失って、そして国際協調も失って軍国主義化し、あの悲惨な第2次世界大戦に突入していくのですが、原敬首相が暗殺されずに、さらにもう何年か総理大臣を続け、そして原敬首相が総理大臣を辞めたあとも原敬路線を引き継ぐような人が、その後総理大臣にどンドンなっていれば、日本はアメリカと戦争することもなければ、中国で泥沼の戦争もやることにはならず、また韓国併合以来朝鮮半島を日本の領土としていたんですね。無理に軍事力で朝鮮半島を押さえている必要もなくなりますから、韓国の独立、日本からの自立、国際社会の一員としての韓国、朝鮮の自立ということも達成できていたのではないかと思います。

そうならなかったのが非常に残念なんですけど、日本が第2次世界大戦をしないで済む可能性があったということは、これは大事なこととして理解をすべきだと思います。それが岩手県が生んだ原敬さんの業績を尊重し、原敬さんの無念に応えることでもあります。

明治維新というものが、1868年の明治維新の50年前に相馬大作こと下斗米秀之進が始めて、そして明治維新の1868年の50年後、原敬首相就任という形で完成したと。

そういう明治維新の見方をすることによって、明治維新は薩長などの西南雄藩だけの偉業ではなく、日本全体で実現したことだったという理解が得られますし、明治維新は日本の近代化に加えて、民主化、そして国際協調の可能性という意義も持つものであったとの理解が得られるであります。

ということで、「明治維新は岩手で始まり岩手県人が完成させた」という話は、我々岩手県人がそれを自信につなげ、あるいは自慢にするというだけではなく、日本全体としてこういったものの見方をしたほうが日本のためになるんじゃないか。

特にこれからの日本のあり方を考えていくときに、日本をやたら分断するのではなくて、特にこの「学びのネットワーク」について、自分を高める勉強とか、あるいは剣術のような修行とか、そういった自分を高めようとする志のネットワークでもある「学びのネットワーク」で、日本全体がつながり日本は

成功するんだということと、そして日本は外国とも仲良くやっていくんですよという日本のあり方も、これからの未来に向かって我々が思っていることがとても大事だと思います。

「明治維新は岩手で始まり岩手県人が完成させた」ということでありましたが、その中でここ二戸の地が果たした役割は非常に大きなものだったんですね。福岡、金田一、そして今の二戸市の周辺のカシオペアと呼ばれ連携している市町村も併せて、二戸エリアが大変すばらしい場所だということが、改めて感じられたのではないのでしょうか。

最後に、そのような二戸エリアで岩手県がこれからどのような未来図を描き、そしてどのような地域振興をしようとしているのかを簡単に紹介したいと思います。

それは、岩手県次期総合計画（「いわて県民計画（2019～2028）」）というものに全て書かれているんですが、これは皆さんの手元にはありません。皆さんの手元にある資料にも載っていない続きの話です。この明治150周年を迎えたのが今年なんですけれども、来年以降、明治151周年以降に岩手をどうするのか、そしてこの二戸エリアをどうするのかという話を最後にしたいと思います。

岩手県次期総合計画は、まだ案の段階であり、2月から3月にかけての県議会2月定例会において、県議会の承認をいただく予定です。それまでは、まだあそこをこうしたらいいんじゃないとか、これもつけ加えた方がいいんじゃないか、というような話合いの段階でありますので、気がついたことがあればどんどんお寄せいただければいいのですが、岩手県次期総合計画の案の文章は、岩手県のホームページから見るできるようになっています。

この岩手県次期総合計画は、県全体の計画の他に、岩手を四つに分けたそれぞれの広域エリアの計画も載せてありまして、二戸エリアと久慈エリアを合わせた県北広域振興圏の計画が掲げられています。

県北広域振興圏の、今はまだ原案ですけども、目指す姿は多様かつ豊富な資源・技術、培われた知恵・文化を生かし、北東北・北海道に広がる交流連携を深めながら、新たな地域振興を展開する地域というものです。

ちょっと抽象的ですね。具体的に話をしていきましょう。

北東北・北海道に広がる交流連携が一つポイントですね。

縄文遺跡の世界遺産登録を目指す取組を通じて、北海道・青森・秋田・岩手の1道3県の連携がどんどん深まっています。函館まで新幹線が通ったこともあり、新幹線を使えば二戸から函館までも、ひよいといけるようになっているわけですね。

そのような北海道・北東北という広がりの中で、ここ二戸エリアはその中心的な位置を占めるわけです。もともと北東北3県、青森・秋田・岩手の連携を図るときに、中心は大体この辺なわけでありまして、そこに函館のあたり北海道南部、道南を入れても、この二戸エリアが中心であります。

そういう大事な中心性を持っている地域なわけですね。

そして、この地域は再生可能エネルギーの可能性が豊かな地域でもあります。

既に風力発電所がありますね。太陽光発電も行われています。そして、バイオマス、これは、鳥のフンとかですね、そういうものを燃やしてエネルギーにすることが大々的に行われています。全国的にも有数の再生可能エネルギーの可能性が高いエリアです。

そして、多様な気候、地形、風土などを生かした農林漁業、レタス、ホウレンソウ、最近ではリンゴのはるか・冬恋、またサクランボ、ブルーベリーも生産が増えています。

ホップ、雑穀も全国有数の生産量です。そして、豊富な森林資源を背景に、シイタケも立派なものが採れますし、また全国有数のプロイラー産業がこのエリアには集積しています。安全・安心で魅力的な農林水産業を発展させることができますし、また関連して食産業の振興が期待できます。国際的な賞を受けている日本酒や煎餅・チョコレートをつくっている会社もありますね。世界に通用するような食産業が既に育ってきている地域です。

また、アパレル産業、繊維産業ですね。これも世界の有名ブランドのファッション性の高い服を作っているところとか、特別な運動着、スポーツウェア、ユニフォーム、そういった特別な技術を生かしたアパレル産業がこの地域にはあります。

そして、御所野遺跡や漆に代表される伝統に培われた地域資源もあります。二戸エリアにおける歴史の層の厚みというのはやはり全国有数です。

まず縄文遺跡からあるところがすごいわけでありまして、さらに「爾薩体（にさったい）村」の「伊加古（いかこ）」。聞いたことがある方はいますか。やっぱりいますね。胆沢の「阿弔流為（アテルイ）」に匹敵する蝦夷（えみし）の英雄ですね、二人とも平安時代の初め頃に活躍した英雄です。

そして、我らが九戸政実公がいて、我らが相馬大作、下斗米秀之進がいて、あとは「ユタとふしぎな仲間たち」という小説が書かれテレビドラマにもなって、劇団四季のミュージカルにもなっているという文化、座敷わらしがいるという文化もあります。

馬淵川流域の独特な豊かな自然環境の中で、歴史・文化が積み重ねられて今に至っているわけです。

文化については、先ほど浄法寺漆にちらっと触れましたけれども、漆については本当にここが世界の中心ですね。日本の漆は 12,000 年の歴史を持ち、日本で最も漆が採れるのが浄法寺でありますから、浄法寺のあたりが漆に関してはもう既に世界の中心であります。

また、天台寺の存在もすばらしいですよ。あそこにある鉞彫りの仏像、ちょっと前まで木だったものがそこから仏様がバババツと、木が仏様に変身するということを表現するために、敢えて彫り痕を残して作った仏像が天台寺に飾られているわけですけども、あれは日本における仏教の発展の歴史の中で、やはり決定的に貴重な仏像です。それがこのエリアにあるということですね。

文化の関連でいえば、スポーツはカーリング、剣道、なぎなた、このエリアの十八番のスポーツがありますし、また野球のようなメジャースポーツも大変強いエリアであります。

そういった地域の特性を踏まえて、地域振興を図っていこうということなんですけれども、今回の次期総合計画では普通の計画に加えて、新しい時代を切り拓くプロジェクトを設けてあります。AI・人工知能とかですね、ロボットとか、IoT・モノのインターネット、そういう第4次産業革命技術が今、大いに発展していて、テクノロジーの進歩なども大いに活用した新しいタイプの地域振興を、来年度から10年間やってこうということが計画案に盛り込まれていて、その中に「北いわて産業・社会革新ゾーンプロジェクト」があります。

聞いたことがないようなタイトルかと思えますけれども、この北いわてにおける産業と社会を革新させていく、ここをそういうゾーンにしていくプロジェクトですね。

プロジェクトの狙いは、豊かな地域資源と高速道路や新幹線などの高速交通網の進展を生かし、地域の特徴的な産業の振興や県域を越えた広域連携による交流人口の拡大、豊富な再生可能エネルギー資源の産業分野、生活分野での利用促進など、県北圏域を始めとする北いわての持つポテンシャルを最大限に発揮させる地域振興を図るとともに、人口減少と高齢化環境問題に対応する社会づくりを一体的に推

進することで、あらゆる世代が生き生きと暮らし、持続的に発展する先進的なゾーンの創造を目指すというものであります。

内容は、あらゆる世代が活躍する地域産業の展開として、食産業、アパレル産業、漆関連産業などの拡大、その中でライフスタイルに合わせた新しい働き方の実現や女性・シニアの活躍の場の拡大が盛り込まれています。

農林水産業や食産業、観光産業、エネルギー産業などの融合による新たな産業の創出と、起業や事業承継による若者の地元定着やU・Iターンの促進というのが盛り込まれています。

内容の2番目には、北海道・北東北広域交流圏の形成による交流人口の拡大。やはりこの北海道・北東北という枠組みの中で、このエリアが果たす役割は大いに期待できるものがあります。

3番目は、豊富な再生可能エネルギー資源を生かした地域の振興。

4番目には、中山間地域における快適な社会の形成。この二戸エリア、福岡の地は政実公の時代から都会だったわけでありましてけれども、山の中の人口の少ない、いわゆる中山間地域という場所もたくさんあるエリアですが、大学等と連携した新たな社会サービスの提供などによる高齢者等が、安全・安心で生き生きと暮らせる生活環境の整備、空き家、耕作放棄地などの遊休資産を有効に活用するシェアリング・エコノミーの推進や、PFIなどの公民連携の手法を導入した持続的な社会資本の整備と効果的な運用による住みやすい地域づくり、PFI、一言で言うと民間活力を生かした地域づくり、行政だけでやるのではなくて、民間力も活用した地域づくりということですね。

そして、歴史や文化などを生かしたコミュニティ活動の活発化による社会参画機会の拡大、二戸の市民文士劇、相馬大作や九戸政実をテーマにしたさまざまな取組もこのエリアの社会を豊かにすることにつながっていきます。

5番目、地域の未来を担う人材の育成。県内外の大学や地域の高等学校等の連携による地域社会の未来を担う人材の育成、若手経営者や後継者、企業等の中核人材など地域産業の未来を担う人材の育成、農業など基幹産業の知識技術習得機会の拡充による多様な人材の確保と就業支援。地域づくりで一番大事なのは、やはり人づくりです。

その地域を支えられる、また地域をすばらしい場所にしていくことができる人材育成、相馬大作＝下斗米秀之進が兵聖閣を作ってやってきたようなことですし、小保内親子が会輔社を立ち上げてそれを引き継いだようなことを、今我々がやらなければならないと思っています。

6番目に、多様な主体の参画と協働による地域づくりの推進。大学を中心に市町村や企業、団体など多様な主体が参画し、将来を見据えた地域課題の解決や人材育成などに長期的に取り組む。

大学があちこちに出てきて、この辺に大学はないぞと思われるかもしれませんが、岩手大学や岩手県立大学、さらには、東京大学にも協力を依頼しています。

全国のいろいろな大学で地域研究、日本の地域を開発していきたいということを研究したり実践している人たちを、どんどんこの二戸エリアに連れてきて、地元の皆さんと意見交換しながら話し合って何をやるか決めたり、あるいは決めないでそれぞれやりたいことをやったり、そこに大学人をどんどん巻き込んでいくのがこのプロジェクトの一つの特徴です。

これはまさに相馬大作＝下斗米秀之進が、そして後の小保内親子がやったことですが、このエリアの人たちだけではなくて、江戸、東京の学者たちともお付き合いをしたり、西日本の学者とお付き合いをしたり、「学びのネットワーク」を全国に広げてその力で地域も良くしようと。

思えば相馬大作時代、そして会輔社の時代、明治維新という大きな時代の流れの中で、日本全体を変えるためにみんなで頑張ろうとやっていて、その分この地域を良くするということにあまり力を注げなかった時代だったかもしれません。

でも今は地方創生の時代、日本国政府も先頭に立って、まずは地方を良くしようという時代になっていますので、我々が創り上げる「学びのネットワーク」は、二戸エリアのような地域を良くするために働いてもらう、そういう「学びのネットワーク」をフル活用していこうということもこのプロジェクトに盛り込まれております。

私の話の時間の終わりが来てしまいましたが、歴史というのはやはり未来に向かうために、ある程度知っておくと参考になるのではないかと思います。

自分たちが今いる場所で、過去にもものすごいことをやった人達がいる。すごいことを考えた人たちがいる。自分たちにもそういうことができるのではないか。自分たちもそういうことをやらなければならないのではないか。そういう主体性を強くすることに役に立つと思います。

外国人と交流したり外国に行ったりすることも、主体性を自分の中から掘り起こし、主体性を強くしていくことに役立つのですが、そういう国際的な活動と並んで、地元の歴史を深く掘り下げていくことが主体性を強くして、ひいては今いる場所が中心なんだという感じにしていく第一歩になると思いますので、今日は特に高校生の皆さんに、それぞれ一人一人が自分のいるところが中心だという視点を持ってもらい、大いに主体性を発揮して、やりたいこと、やれること、やらなければならないことをどんどんやって欲しいということを申し上げて私の話を終わります。

御清聴ありがとうございました。